

明治キリスト教徒の社会主義思想 (一)

松井知至の「社会主義」について

住 谷 悦 治

はしがき

わたくしは社会思想の研究にさいして、社会思想は社会改造の原理としての改革思想として追求する。そしてこのように考えている。——われわれは、自分たちの置かれた世紀のこの複雑な矛盾にみちた社会関係のうち生き抜いてゆく場合に、しっかり自己を大地に立たしめ、自己の行動を指導し、統制してゆく何らかの拠りどころを求めねばならない。思想なるものが、その拠りどころを与えてくれるのである。思想こそが、われわれが自分にたいし、他の人にたいし、社会一般にたいし、日常の自分の行動や態度を規制してゆく原理なのである。社会にたいし、人生に処し、正しいと確信させ、行動させるものは、われわれのいづく思想である。

その思想はわれわれの社会にたいする認識と意欲とに基づいて生まれるものであり、それが日常の実践の過程において自覚的に把握されるとき、はじめて生命をうごかす思想としての意義と機能とを有つようになる。敗戦の塵と血とにまみれた過去の社会と国家から脱却し、さらにそれを改造し、よりよいものを建設しようとする改革思想を求めようとする。そうした意味で、社会思想は改造の思想でなければならぬ。またそれであつてこそ社会思想は実際の社会生活の基準となり、それを懐く人々の行動や態度を規制して、現実生命と生甲斐とをもたらすものとなる。もちろん、人間は個人であるが、同時に社会的人間であるから、個々人の意識のうち内在している生活原理としての社会思想は、社会改造思想として、個人的に価値体系としての意義をもつとともに、社会的には、価値体系としての社会思想である。改造思想としての社会思想は、かくて価値体系として、個人の行動と態度とを規制する原理である。いまわたくしはこのような意義における社会思想を追求しているわけである。

いまわれわれの眼前には、古来いくたのそうした社会思想が展開されてきた。そして汲めどもつきぬ多くの、深く高く美しい多くの社会思想が与えられている。その中には、現実の社会的・現実的の裏づけとともに、いよいよ改造の原理としての底力をもって人々の心の奥に迫ってきているものがある。それらの諸思想には、それぞれ偉大な先覚的思想家があり、その社会国家との特殊性があり、思想的・理論的特質があり、類似があり、関連がある。よりよき社会を建設し、よりよき社会に幸福に生きようとする人々は、これらの社会思想のいづれかに共鳴し、いづれかに生活原理を見出さなければならぬ。事実歴史的にそれら多くの社会思想家は、身をもってそのことを示してきた。社会思想の探究は、このような考慮を前提として、とくに歴史

3 明治キリスト教徒の社会主義思想 (1)

的な意味があるといえよう。

このような意味において、社会思想は一般に社会主義思想であるが、人間はふるくから、みずからの生活、みずからの社会についての美わしき夢とあこがれとを描いてきた。いづれの時代でも、現在自分たちの住んでいるあるがままの社会が、不完全であり、多くの人々に不幸や悲惨をもたらしている涙の谷であるというようなことが考えられてきたので、それぞれその時代ごとに偉大な思想家、すぐれた先駆者が出現して、「かくあらまほしい」「かくなければならぬ」と考える完全な理想社会を夢想せしめ、説教せしめ、著述せしめ、改革の行動せしめてきたのであった。それら社会思想の流れにおいて、キリスト教社会主義思想は、その把持者の人物、熱意、清純、献身等々において特質ある思想分野を形成しているがごとくである。わが国では、明治時代において、そうした特長を示していると思われるので、とくにわれわれの興味・関心を惹くのである。

明治時代のキリスト教社会主義思想については、すでにいくたの研究発表がなされておるわけであり、とくにわが国では、明治社会主義の先駆者には、キリスト教徒が多くみられたことも周知のことである。村井知至は安部磯雄、岸本能武太とともにわが同志社出身の優ぐれたキリスト教社会主義者として知られているので、その意味でここに彼れのキリスト教社会主義思想を辿ってみることにした。

村井知至は、明治十七年に岸本能武太と同期生として同志社英学校英語科を卒業しているが、このクラスには、原田助、堀貞一、亀山昇、大西祝、綱島佳吉など同志社における歴史的な名士がいた。わたくしが彼の名を、わが国の社会主義史上に記憶しているのは、明治三十一年に創立された「社会主義研究会」の会長であったこと、明治三十四年に結党されて即日禁止された「社会民主党」にたいして、その創立者として著名な安

部磯雄、片山潜、幸徳伝次郎、木下尚江、河上清、西川光次郎の六名につづいて、岸本能武太とともにこれに参加していることと、これよりさき明治三十二年に、労働新聞社から「社会主義 Socialism」なる著述を公けにしていることよつてである。

社会主義研究会は、その名に示されたように「社会主義の研究を目的として起つた団体であり、公言したところによれば「其目的は社会主義の原理と、日本に應用するの可否を考究するに在り」という。芝のユニテリアン協会を会場とし、村井を会長として、幹事は豊崎善之助、会員には高木正義、河上清、岸本能武太、片山潜、佐治実然、幸徳伝次郎、金子喜一等が在り、会員相互例会において、サン・シモン、フーリエ、プルードン、マルクスなどの社会主義について討議研究、講演を為し、實際問題をも捉えて討論したという。村井の論著「社会主義」にはこれらの外国の思想が紹介されているのである。村井の参加した「社会民主党」は、明治三十四年五月の創立で周知のごとく安部磯雄、片山潜、幸徳伝次郎、木下尚江、河上清、西川光次郎が創立者として代表し、幸徳伝次郎以外はすべてキリスト教徒であつたこと、さらに党参加者のうちにもなおキリスト教徒がおつたことは、わが国の初期社会主義の特徴である。この社会民主党は伊藤博文内閣によつて即日解散せしめられたが（内相末松謙澄、警視總監安楽兼道）、その宣言の理想とする要点は、(一)人類の同胞主義を拡張し、(二)万国平和の為に先づ軍備を全廢し、(三)階級制度を全廢し、(四)土地及び資本を悉く公有とし、(五)鉄道、船舶等の如き交通機関を悉く公有とし、(六)財富の分配を公平にし、(七)政權を平等にし、(八)人民平等教育のために、国家は全く教育費用を負担すべきである、等の数項であつた。これはいわゆる「原則綱領」ともいふべきもので、さらに「行動綱領」として現実のあらゆる社会問題にたいして二十八箇条を掲げて実践活動を試みよ

うとしたのである。

これらの綱領を吟味するとき、党参加者の一人として村井知至が、社会主義をもってキリスト教と「異名同躰」の観ありと、その著「社会主義」にその思想的相似を七箇条に分つて論評・解説・紹介したのも、けだし理由のないことではない。明治時代におけるキリスト教社会主義者の社会主義にたいする理解の典型的なものとして、ここに、村井知至の思想的特徴をみようとするゆえんである。

はしがき 二

明治中期における社会主義の紹介書として民友社の「現時の社会主義」と並んで優れた著書の一つはこの「社会主義」であるが、本書は、著者によつてジョージ・D・ヘロン教授 Professor George D. Herron D. D. に公式にデディケートされている。そしてわが学界に明治十九年ドイツ講壇社会主義の思想を詳細に紹介した東大教授和田垣謙三と、ほかに松村介石、横井時雄の二名士の序文が巻頭を飾っている。珍らしいことは、和田垣博士が講壇社会主義（新歴史学派の社会政策学会）を「淡水社会主義」とも呼んでいることでの呼び名はまことに特異的である。松村介石はこの序文で「……其社会主義の学に於て又た之を講ずるの道に於て、日本の今日、村井君の如きは決して第二流に下るべき人物にあらざるを信ず、然らば則其著書の価値また論ぜずして可なるべし」とまで絶賛しているのである。また横井時雄は、「吾友村井君深く社会主義の諸説を研究する茲に年あり、今其大要を摘んで之を説明し、以て、邦人に告げんとす、其実行上に於ける利害得失に

至りては、素より更に大に考究を要するなるべしと雖も、この辺の知識を邦人に頒布せんとするの目的に至りては、吾人大に之を賛成せざる可らず」と書いてある。

著者自身は、「多年社会学に興味を有し深く之を研究するの志を抱き」、のち米國に遊學し、アンドヴァー・セミナリーに在って当時著名であつたタッカー教授に就いて社会学を研究し、二度目の米國への遊學においては、アイオア大学に入りヘロン教授について社会問題並びに社会学を研究し、さらにアメリカ各地の社会事業を視察し、それによつて、「ますます社会主義の妙理に服し之を邦人に伝へんと欲するの念を増せり」と述べている。本書は一六三頁の小著であるが、キリスト教徒としての社会思想家として特質ある社会主義觀を示したものであるといわねばならぬ。本書はつぎの諸問題に触れた、社会主義評論である。

第一章欧州現時の社会問題、第二章社会主義の定義、第三章社会主義の本領、第四章社会主義と道德、第五章社会主義と教育、第六章社会主義と美術、第七章社会主義と婦人、第八章社会主義と労働組合、第九章社会主義と基督教、第十章理想の社会。この目次でも察せられるように、「社会主義と美術」や「社会主義と基督教」などという項目をとくに掲げているところに、著者のわが國の社会主義思想史上に特殊の立場を与えられてよいと思う。

一 階級対立と社会主義の効用を説く

著者が、「社会主義研究会」の会長を勤めたり、「社会民主党」への参加者であつたことよりして、社会主

義を認め、礼讃し、主張していることはいうまでもない。明治時代の社会主義思想家に共通した社会主義思想は、現在いう空想的社会主義にたいする科学的社会主義とかマルクス社会主義というのではなく、一般的に、個人主義、個人本位的社会原理にたいする社会主義、社会本位の社会原理に立つ社会主義というように理解されている点である。社会主義一般としての社会主義であり、空想的社会主義にも、共産主義にも共通した社会本位的社会への理想と一般的・観念的に結びつく社会主義思想であるということである。たとえマルクスの名が出てくるとしてもけっしてマルクス社会主義ではなく、多分に理想的な、ユートピア社会主義思想と共通点を有っている社会主義である。理想主義的であり、情熱的であり、説教的・教育的で頗る啓蒙的であるところにその特徴がある。本書第一章では、冒頭において近代社会の第一歩として、「十八世紀の未より十九世紀の初めに掛けて、欧州には二大革命ありき。一は則ち仏国革命にして他は則ち産業革命なりき」と論じ、この二つの政治的・経済的変革を契機として、近代新工業制度——現在いう資本主義社会——が展開したことを論じ、「則ち富の増加する割合に準じて貧困も増加し一方に富の堆積するなれば、他方に窮鬼の群るを見たり」（七頁）とし、ヘンリー・ジョージの名著「進歩と貧困」に拠りつつ、近代産業社会に特有な恐慌の繰返さるる必然を説き、労働者の困窮を指摘し、階級の対立と階級闘争を觀察している。そしてここに社会主義出現の根拠を求めているので、この一般的觀察の正しいことはいうまでもない。「故に彼の富の増加といふは畢竟富の一方に集注したるに過ぎずして、決して社会一般の幸福を増したるにあらず、資本家は独り福利を肆にして、労働者は愈々窮鬼に襲はれつつあるなり。社会は確かに不平均となれり、有力の階級と無能の階級とを生じ来れり。」（二一頁）とし、かかる近代社会を評し、「近世の文明は斯る咄々怪事を演ぜり、嗚呼是れ亦文明乎」と慨

嘆しているのであるが、本書は、社会主義の単なる客観的な学問的・解説的・紹介的な著書でないことを示しているのである。したがって、「独り社会主義は社会の根本的革新を計図する者なれば、其説にして一度実行されんか、恰も快刀乱麻を截つが如く明かにあらゆる問題を解釈し尽し、真成に社会の救済を完ふするに足らん」、(一五頁)。として、一時の弥縫策のごとき取るに足らぬものとして斥けているのである。

二 社会主義思想を如何に理解したか

著者の社会主義の理解については、エディンボロウ大学教授フリント、イギリス監督ウエストコット、「アル・エゴリニエーション社会進化論」の著者ベンジャミン・キッド、「ハンドブック・オブ・ソシヤリズム社会主義提要」の著者ダブルユー・デ・ピ・ブリス、「クライスト・オブ・ツトアット今日の基督」の著者ボストンの牧師ジ・エ・ゴルドン、六個月間に百万部を売尽した名著「メリ・イン・グランド楽しき英国」の著者ロバート・ブラッチフォード等々の思想家・学者の説を引用し、社会主義思想の諸説を紹介し、さらに、村井自身の賛意を示している「クイン・センズ・オブ・ソシヤリズム社会主義の本領」の著者シャップレ博士や名著「ヒストリー・オブ・ソシヤリズム社会主義史」の著者カーカップや「エンサイクロペディア・ブリタニカ」の中の「社会主義」の解説、リチャード・イリー教授などを援用して一般的・公平的な社会主義思想を紹介しているのである。それは、前述したようにけっしてマルクス科学的な社会主義ではなく、むしろ社会主義一般、社会本位の社会原理としての社会主義思想ともいべきものである。

例えばシャップレ博士のいう「社会主義の始及び終は競争的私有資本を更革して連合的協同資本となさんとするに在り」というのをもって「社会主義の本旨を道破し得たりと謂うべし」(二二頁)と賛成し、あるいはつ

ぎの如くカーカップ教授の見解を「尤も簡明にして正鵠を得たるに似たり」(二三頁)と述べている。「社会主義の本領は是なり、曰く生産の手段(土地及び資本)を共有する協同的労働者が相依携して工業を営むに至らんことを提議するに在り。蓋し現今の社会に於ては、競争的私有資本を有する資本家が賃銀を払うて労働者を雇用し以て工業を営め共、将来に於ては全然此制度を更め共有資本を用い協同的労働に依り平等均一の分配をなすの目的を以て工業を営むに至らざるべからざればなり」と。またイリー教授は、村井によれば、シヤツフレヤカーカップと根本的立場は異るところはないにしても「一層明晰に其意を言明」しているという。曰く「社会主義とは工業社会に於て新に計画せらるる社会制度にして偉大なる物質的生産機関に於ける私有財産を廃し之に代へて合同資本を作り、更に各人協同して生産を取り行ふべきを唱へ、社会が公平に社会収入を分配し、此分配の多分は各個人の私有財産たるを許すべきを主張する者なり。」(二三頁)と。これらの援用を重ねてのち村井の積極的理解が叙述されるわけである。

村井によれば、イリーの説のごとく社会主義は私有資本を廃して共有あるいは国有資本制度とし、「現今産業社会の峻刻なる法則たる競争に代ゆるに各人の協働を以てし、公平なる富の分配を行ひて社会全軀の福祉を經画せんとする社会改良策に外ならざるなり」(二四頁)という理解に立つ。彼にとっては、社会主義の一般的社会原理が関心事であり、とくに社会主義社会一般におけるその精神的基調が重要視され、現代資本主義社会(工業社会、産業社会)における個人本位的社会原理という精神的基調に対置された社会本位的社会原理——「社会中心主義」とか「非個人主義」というような社会主義の精神的基調が一般的に社会学的に把えられているのである。

「されば社会主義は則ち非個人主義なり、現今の社会を支配せる私心私欲に基づく個人主義に反抗し社会全軀の福利を計図する公共的精神の発露なり」(二四頁)とし、さらに「個人主義は則ち個人中心主義にして社会主義は即ち社会中心主義なり。個人主義は社会を以て単なる集合体、則ち各自独立せる行為の合衆したるに過ぎずと為す、故に社会全体の利害は問うに及ばず唯各個人の私利を営み得ば足れりというに至る、其結果は慘毒なる私利競争に至らずば已まざるなり。之に反し社会主義に於ては社会を以て一個の有機体と認め各人協同して社会全軀の幸福を完うすべしと為す、故に個人の私利競争は社会の分裂を来し各人の協和は社会の総合を固うするに至るを信ず」(二五頁)と。したがって「社会主義は個人が相依り相俟つて成る結合的有機組織」であり、社会そのものをもって単位とするから、「社会の公益を重んず」るが「個人主義の社会的関係は冷刻なる約契」に過ぎない。社会主義は「血肉相貫通せる生命的連絡」であるから「個人主義が個人の権利と自由を主張する」のたいして「社会主義は義務と責任を重んず」るのであり、「個人主義は私欲的利得を謀る」のに反し「社会主義は社会的奉仕」を貴ぶのである。個人主義の社会は「競争」に依つて動き、社会主義の社会は「協同」によつて動く。個人主義の社会は「需要供給の法則」に従い、社会主義の社会は「仁愛正義の法則」に従う。個人主義の目的は「社会の支離滅裂」に向い、社会主義の目的は「依携協同」によつて成る。このような一般的な社会的・精神的基調を分析し、カール・マルクスの見解として、少数の資本家はいわゆる「剰余価値」を収奪して坐食しつづまます富み、政権も教育も社交も快樂も占擅するのに反し、労働者はますます貧しくなりつつある近代の社会的不公平を指摘し、村井は「社会主義は則ち此不公平を医せんと欲する者なり」として「社会主義の本領」を説く。その方法は「一に私有資本を廢し共有資本となすに在り、則ち資

本を共有」(三二頁)となすことである。資本の共有が社会の公益を計るよう^に運営されることを認めているが、その主体は「国家」であるのか、「階級」であるのか、その「国家」、その階級はいかなる国家、いかなる階級であるのか、現在のブルジョア国家の延長された権力であるのか、社会主義国家という歴史的特殊の国家の出現によって運営されるのか、そうした重要な点にたいする理解に乏しいことは村井にかぎらず、殆んどすべての明治社会主義思想家の最大の思想的短所であり欠点であるのは社会思想研究の歴史的な水準の低くさとして一般的に止むをえないことであり、現在深くその点を批判するに及ばないであろう。

村井はいう。「若し夫れ此制度に依つて国家の産業を經營せん乎、決して今日の如く資本家と労働者との二階級を生ずることなく、貧富の懸隔自ら消失し、人々互に牙を磨し爪を礪(とぎ)て競争するの必要なけん。されば現今の社会に充滿する醜汚なる罪惡は自ら迹を絶ち、修羅堂の如き社会は化して平和の天国となるに至らむ、是れ社会主義の齋らす一大祝福なり、否是れ社会主義の宣伝する平和の福音なり」(三三頁)というように、すこぶる説教的・樂觀的・啓蒙的・ユートピア的である。「要するに社会主義は社会の經濟組織に根本的革新を施し、人々相樂んで其職を重んじ、道を行ふの良制度を創建せんと期する者なり」(三九頁)という理想主義的・ユートピア的発言となる。

このことはつぎのごとき叙述によつても明らかである。「十八世紀に於ては人々唯自由權利を重んじ個々己の利益を主張せんとせしが、十九世紀に至りては同胞主義、協愛主義の思想大に起り、博愛仁愛の情益々熾んならんとす……是れ実に時代の精神なり、否尤も美麗なる近世的精神の發露なり。而して社会主義は人情の大義を重んじ、人々相愛の大道を行はんことを期す、社会主義は実に人情主義を以て根本的動念となせるなり。

されば私有資本を廃すといひ、労働の権利を主張すると謂うも、一に工業界に於ける協同優和コラクニケイを唱ふるに過ぎざるなり、其精神誠に美大にあらずや」(四二頁)という。したがって「資本を共有にし、協同主義を以て生産事業を営み、公平なる配財を行いて経済上の平等社会を建設し、依って以って十九世紀の一大精神を發揮せんとするは、実に社会主義の本領なり」(四三頁)というのが村井知至の社会主義思想一般の結語である。

三 キリスト教と社会主義とはいかなる 思想的共通点があるか

村井の社会主義についての理解はすでに察せられるように、その一般的理解において理想主義的・啓蒙的・ユトピア的な色彩を示しているが、社会主義と教育、道德、芸術に関する関係の理解においても、一貫してその特徴を観ることができるといふ。それは社会主義とキリスト教との共通点の説明においても同様であることはいふまでもない。

社会主義がすでに述べたような理想的社会をつくり出すことを本領とするかぎり、われわれは、「進んで経世の策を講じ更に完美なる理想の社会を作り出さんことを勉むべき而已」(五七頁)とし、その社会を組織するならば、「人々は相争うの必要なく、静かに其業を勉め、其業を一にするを得ん」とし、「各人の道德的感情は自然に発露し得べく、随って道德の進歩すること今日に幾十倍せむ」(五八頁)といつて社会主義の道德的功德を述べている。教育についても「国家事業として教育を經營するは実に至当にして尤も要用なるもの」であ

り、「教育は社会の公有物」としてその教育要求、目的の達成の可能性を論じている。

しかし「欧米近今の事実を徴すれば」、社会主義と基督教とは恰も仇敵の如く、氷炭相容れざるものとされてきた。キリスト教徒は社会主義を忌み、社会主義者はまた盛んにキリスト教徒に反対しているが、実は、「近代の基督教が俗化して貴族的となりしが故」であつて、初期のキリスト教は、甚だしく社会主義と相似たるものがあつたのみでなく、実は「全く其精神思想を等しくし殆んど異名同躰の觀ありき」(二二九頁)といつて、キリスト教と社会主義の深き共通点を理解しているのである。村井の評論の基底となつてゐるものは、いふまでもなくキリスト教そのもの、新旧約「聖書」の教理における理想主義的社会的な思想であるが、彼は、しばしばフランス社会主義思想家サン・シモンの名著「新基督教」の思想を援用しているのである。サン・シモンがエンゲルスによつて「空想的社会主義者」として、社会主義思想史上、思想的地位と特質とを与えられたことは周知のことであるが、このサン・シモンの思想が、わが国の社会主義思想史上、村井によつて援用されたことは注目に値するといえる。彼は、サン・シモンが著書「新基督教」において社会主義が古代においてキリスト教の神髄に合致してその本質を發揮したものであることを主張したことを卓見であるとして心服し、村井みづからの経験に徴してみても、はじめ初代キリスト教を研究して、その手懸りによつて社会主義の真理を認めるようになり、また社会主義を信じたために、またキリスト教の新意義を悟るようになったと回顧している。「実に予は古代の基督教は近時の社会主義を代義し、近時の社会主義は古代の基督教を代表する者なることを疑はざるなり」と述べて、社会主義とキリスト教との類似点を七箇条に分つて挙説しているのである。

その第一は、社会主義とキリスト教とは、その目的が同一であるという点である。今日のキリスト教は、た

だ人を導いて天国の救いに入らしめ、「未来の天国の戸籍を増さんことを勉め」ているが、古代のキリスト教はけっして、そのような姑息な、単なる個人の魂の救済に専心していなかった。キリストをはじめとして、すべての使徒たちは、もちろん「多少来世の観念なきにあらざりしかど、専心一意、唯人類の救済を謀り理想の天国を地上に建設せんことを励み」、人間が自ら神の子であることを信じ、相互に兄弟であることを信じ、すべての人々が優愛和楽のうちこの世において親睦し協合するようにした。ゆえにキリスト教は愛の宗教であり、その道は人道であった。キリストとその使徒たちは、近世のいわゆる「人類同胞主義」を主張し、平等的社会を実現しようと欲していたのである。「彼等は人類相愛するの大道に基き利己私欲の念を離れて相協同せんとを教へたりき」といい、初代キリスト教が現実社会における競争制度を非とし、社会的協同の真理を説いたということは、その理想の偉大であったことを示すものであるとする。しかも村井によれば、社会主義の理想は「実に初代基督教の説く所と秋毫も相異なるなきなり」(一三三頁)とその理想の同一性を論評した。社会主義は根本的に個人主義を否認し、社会を私利私欲の戦場たらしめず、人々が相互扶助をよころ楽園としようとする。したがって「社会主義の本領は平等主義に在り、人類同胞主義に在り」、そのことは「基督教的道徳の真随する愛と同一であり、「其精神心術に於て初代の基督教と今日の社会主義とは全く符節を合するが如し」と論じている。このようにキリスト教と社会主義との理想・目的の同一性は、キリスト教社会主義の歴史的存在の意義を示すものである。ただ「其方法を異にするのみにして其精神目的に至っては両者全く趣を同ふせり」と述べているように、キリスト教の理想主義や啓蒙的・精神的・説得主義の立場が社会主義の革命的な、あるいは階級闘争的な方法と相容れないことを認めているもので、そこにこそまたキリスト教社会主義の特殊

的な存在意義があるわけである。

第二に両者の共通点として掲げていることは宣伝における熱意の相似である。このことは初代キリスト教徒の多くの殉教の事実の歴史においてみられるように、心身いっさいを捧げ、犠牲のうえに殉教的伝道を事としたこと、「新約聖書使徒行伝」に示されるごとくである。これに関連して彼等は、「近代社会主義の運動を見るに亦之と甚だ相似たり」といい、イリー教授が「近代に於て社会主義ほど人々の良心を動かし且つ烈火の如き熱心と献身的精神を鼓吹する者他に復た見るべからず」との讃辞を引用して、幾百幾千の社会主義者が、私欲利念を捨てて運動にしたがい、身を博愛仁義に献ぐるに至らしめたことを述べているが、村井が社会主義運動者をこのような博愛仁義の人道的運動として理解しているところに、キリスト教社会主義者としての社会主義の把え方が示されているわけである。社会革命運動者の活動の歴史を播けば、村井の観察したように、イギリスのフェビアン協会の人々も、ロシア革命史においてみられるようにデカブリスト運動やナロードニキ運動、ヘルツェンやクロボトキン以後いくたの革命家の事蹟、レーニン、トロツキーらロシア革命参加の何百何千の人々、ドイツ革命参加の人々、中国革命の人々等々現代に至る各国のプロレタリア運動の歴史は、まさに、その実例を示すもので、村井が感激をもって、初代キリスト教殉教者と、社会主義運動家との献身的熱意を同視し、社会主義者の運動を目し、「皆彼等が一種の宗教的熱心を有することを語らざるなし」(一三六頁)と述べたのは、もちろん注目に値することであろう。

第三に、これと同じ現象であるが、村井は、宗教的殉教者と、社会主義者とが、何れも支配階級——社会——の迫害に遭つてゐることを挙げている。社会革命家の殉教者的運命は、彼の指摘したとおりであろう。キ

リスト教はユダヤにおいても、ローマにおいても限りなき弾圧下に迫害されつつ宣教し、殉教した。キリスト教は「邪宗」をもって目せられたことは事実であり、わが日本の近代史においてもその例に漏れない。初代キリスト教徒と同じく「社会の秩序を乱る乱臣賊子をもって指弾され」、「獄に撃がれ」、「刑に処せられ」・「石にて殴られ」、「社会よりあらゆる虐遇酷待を受け」た。弾圧者、迫害者は主として「当時の政治家殊に富者貴族なりき」という。社会主義運動の歴史を顧みれば、同じように、虐遇酷待を忍び、「古代キリスト教のほかには社会主義の如く社会より嫌悪厭せられたる者はあらざるべし」(一三七頁)といい、フランス、ドイツの社会党への弾圧振りや残酷なる迫害と刑罰を挙げ、それに耐えた社会主義者を初代キリスト教の殉教者と同視しているところに彼れの社会主義観が窺われるのである。

第四には、キリスト教も社会主義もその伝播力が迅速である点に相似点を認めている。「殉教者の血は教会を肥した」という。キリスト教は社会から迫害を受け、支配者から弾圧されればされるほど盛んに伝播し、「使徒の熱心は騰上したけりん、炎々天を焦して遂に羅馬の天下を蔽いぬ」(一三九頁)と回顧的な叙述をし、それに对照せしめて、近代の社会主義が例えばドイツにおいて一八六〇年以後、弾圧下に社会民主党として急激にその黨員数増したことを挙げ、その状態を称してシーザーの名言「ベニ・ビディ・ビシ」——「吾来り、吾観、吾勝つ」——そのままであると論評しているのである。

第五には、キリスト教と同じく、その思想は、社会主義においても世界的であることを挙げている。「基督教は大に其門戸を宏くし、手を拡げて世界を包擁せんとせり、故に初代よりして既に猶太亜の国境外に溢れ出で、盛んに異邦伝道を始め遂に世界的運動となれり」(一四〇頁)と。それと同じく社会主義も、国境を超えて

世界的運動となっており、カール・マルクスが主唱して組織したインタナショナル「万国労働者同盟」の綱領をみれば、「吾党は国と人種の区別なく、真理と正義と道徳に依って立ち此主義を万国に伝えんことを期す」と唱えているがこれはその主義・思想の世界性を証明するものである。かくキリスト教とともにその思想は世界的であると論じている。

第六には、キリスト教とともに、社会主義も貧民に対して同情の涙を澱ぐものであるとし、すこぶる人道主義的部面を採りあげている。この点についてサン・シモンの思想を挙げて「初代基督教と社会主義の一致する最要点」としている。さらに「新約聖書は貧者に対して多くの慰藉の語を有せり、殊に路加伝第六章に録せる所を見れば、耶蘇は殆ど貧民に覺して富者に敵せんとしたるが如き觀あり」（一四二頁）とし、「社会主義が労働者の朋友となり、其権利を拡張するを以て第一着の運動」となしたこと同じであり、「社会主義の原動力は実人情の大道なりしなり」（一四三頁）といつてその相似点を強調しているのである。

第七には、キリスト教も社会主義もともに兄弟相愛するの美麗なる精神に富んでいるという理想的な側面を掲げている。初代キリスト教信徒らは「恰も今日の共産党の如く財産を共有していた」と、聖書に「誰一人其所有品を己が物と言ふ者なく、凡て之を共に有てり」という言葉を引用し、その姿は「近代の社会主義者が相愛し相互くるは尤も善く似たり」とし、その同志意識の共通点を掲げている。

これらが、キリスト教と社会主義との現象的に「相類似している首要点」であるとし、「その精神、主義に於て両者が完く相一致せり、故に復た同一の現象を演じ出せるのみ」と。かく思想的・主義・主張の相似を叙述し最後に「近代の社会主義は實に一種の改革案にあらずして、実に活ける宗教なり、血と涙あるヒューマニ

ティーの道なり、是れ実に時代の宗教にあらずや。苟くも人道に志し、社会の改善を憶う者は、其身を献げ其力を尽して斯の大主義の為に斃れて可なり」(二四三—二四四頁)とまで極大の讚美を捧げているので、社会主義を「時代の宗教」という精神的・理想的形態において扱っているところに、村井の社会主義の理解の特徴があるといふべきである。

四 社会科学的理解である

このように村井の社会主義に関する理解は社会主義一般としての、社会主義各派・各思想・立場に共通した部分の理想的な把握であり、したがってある意味で「最大公約数」としての抽象的に扱えられた社会主義である。したがってキリスト教の一般的理想・一般的立場と共通点を見出すことが可能であることは当然のことである。別言すれば、社会学的に、個人本位の社会原理に立つ社会(歴史的・具体的には資本主義社会)と社会本位の社会原理(歴史的・具体的には、例えば土地・農業社会主義とか、進化論的社会主義とか、キリスト教社会主義とか、ギルド社会主義とか、空想的社会主義の諸派やマルクスの科学的社会主義とか、無政府主義も社会本位社会原理に立つ社会の一つである)に立つ社会というように一般的原理・思想、そして理想的に、共通的・最大公約数的に扱えられているといえる。したがって、結論として、「社会主義的理想社会」を想定し、それは「社会と個人と各相調和し協同して社会全体の幸福を営むものなり、而して個人は社会に対して責任を負い社会も亦個人に対して責任を負い互に責任を以って相関連するのみ、故に社会主義的理想社会は則ち責任社会なり」(二四四頁)というように

理念として社会学的な理解においてである。社会対個人の関係を抽象的に理念的・観念的に把握し、社会と個人との理想的相関関係を「理想社会の憲法」として存在するものとしているのである。

〔註〕 新カント派の社会主義思想としてシュタウディングガーが高度共同社会関係あるいはその意思関係として(一)目的の同一性、(二)共働者の同等の個人的関心、(三)目的にたいする共同の自発性、(四)共同社会の構成員の権利の平等という社会学的分析をした社会主義社会関係を理念的に想定したことを想わしめる。(F. Staudinger: *Wirtschaftliche Grundlage der Morale*)

先づ第一に個人の社会に対する責任である。世に純粹に「セルフィッシュ自助自成の人」はない。「人の性質も脳力も知識も成功も悉く他人より助けられて得たる所」(二四八頁)とし「吾人は悉く遺伝、教育、境遇の産物のみ、吾性質如何に雄大なるも是れ己れ独り然るにあらざりて父母の教育の賜賚なり、吾事業如何に壮烈なるも是れ一人の力にあらざりて多数者の助力に依るのみ。之を思はば吾人が純粹に自力を以て成し得たるものは殆んど一も之なきに驚かん」(二四八―二四九頁)と。ソクラテスも野蛮人の中に置いたなら彼の高尚の哲理を創生しえないしセキスピアも不文の蛮族の中に育ち住んだならば優妙の才筆を揮いえないと同様であるという。(一四九頁)。かく「社会に対して多大の責任を有する」ことの事實は、宣しく己れを「社会の公益に献ぐべきもの」である。「奉公は実に吾人の天職なり。吾人が社会より依托せられし義務に忠にして社会の為に其力を致す、これ人生価値の存する所なり。豈暖衣飽食して一生を空ふすべけんや」(一五六頁)という。そして村井はジョン・ラスキンの講演の一句、「社会公共の為に生活するにあらずんば吾人遂に社会に生存するの権利なし」という金言を掲げている。これは「個人が社会に対する責任を謂へるもの」で「是れ社会主義責任の第一義にして尤も重大の事たり」(一五五頁)と。同時に「社会は個人の需要に随て給す」べきで「第一、社会は個人の生活に

必要なる衣食住に應ぜざるべからず」とし、第二、社会は教育の祝福を各個人に授けざるべからず」とし、「第三社会は個人の為に娛樂慰藉の設備をなさざるべからず」とする。「美術品のごとき、運動機械の如き、芝居の如き、音楽の如き、又旅行漫遊の方法の如き皆政府が個人の為に予め備うべき要件とす」(一五九—一六〇頁)と。まことに村井の説くが如くであるべく、「かくあらまほしき理想社会」の願望も夢も社会主義の目差すところ、企図するところであるべきである。「その第四は個人の疾病、老廢、不具、死亡に対して可然保護の方法を設けざるべからず」(二六一頁)という。かく「社会は個人の為に其の負うべき責任を尽し、個人も亦赤誠を披いて社会公共の為に尽し、両々相俟って完美なる社会を作り出すを得べし」とする。村井の描く社会主義の理想社会は、かくて、「社会主義の行はるる時は真に社会の理想に達せるものにして、基督教の所謂『天国』なり、社会主義の所謂『ユートピア』なり、否実ネイティブに人類時代ヒューマンエイジなり、道德時代なり。社会の進歩茲に至つて完全に達せりと謂う可し」(二六二頁)と。かくて村井の社会主義論は、社会主義一般としての、最大公約数としての社会主義の理解であることは明かであり、あるいはユトピアンシヤリズムに類似する社会主義の理解であり、科学的理解でなく、理念的把握であり、社会的理解といふべきである。歴史的・発展的理解といへば、村井の社会進化論よりして、中世までの「戦争時代」去つて、近代の「実業時代」来り、「今や又実業時代去つて將に道德時代に入らんとす」という点であり、結語としての感激的言葉は「嗚呼天国は近きに在り、吾人の志は遂に成らんとす、亦楽しい哉」(二六三頁)というのである。まことによく明治キリスト教社会主義者の思想的特質を示しているといふべきである。